

54. 山岳医療

医事万華鏡

『ブルーモーメント』に『マウンテンドクター』、民放で放送されている連続テレビドラマの中で、自然災害から人々の命を守ることに焦点を当てたドラマが、俄かにブームとなつてい

ます。前者は、甚大な気象災害に脅かされる人命を守るため、気象庁・気象研究所所属の研究官を主人公に、現場の最前線で災害を予測しながら命がけて立ち向かうSDM（特別災害対策）本部での奮闘を描いたもの。サブタイトルが「空を読み、命を救え。」もう一つの『マウンテンドクター』は、山岳医療にスポットを当てた、圧倒的なリアリティーとスケール感で描く完全オリジナル作品です。

ストーリーは、長野県松本を舞台に、山岳医療の現場に放り込まれた青年医師が、様々な思いや葛藤を抱えた患者や医療従事者らと触れ合いながら現実と向き合っていくもの。ちなみに、「山岳医療」とは、山で起こりうる病気とケガを治療する医療で、山の知識と医療知識の双方に長けた医師を「山岳医」と言います。中高年層を中心とした登山

者や海外からの登山客の増加に伴い、空前の登山ブームとなっている昨今、そのブームの陰で山での事故は年々増加しています。こうした事態を受け、山岳医療は急激に注目を集めていますが、欧州に比べ日本のそれは遅れており、山岳医数も依然として少ないのが現状です。同作は、そんな山岳医療の実態や課題を丹念に描いた、啓発的な医療ドラマとなっています。

ところで、日本では中世以降、山に籠もって厳しい修行を行うことで悟りを得ることを目的とした「修験道」が広まりました。修験道では山それ自身が畏怖すべき存在であり、かつ精神的修練の場と見なされました。また、イギリスの登山家・ジョージ・マロリーは「そこに山があるから（登る）」という名言を残しています。いずれにしても人々にとつて山とは「哲学的、霊的な存在」であり、そんな山であればこそ、苦勞して登頂した時の達成感は格別なのでしょう。『マウンテンドクター』のサブタイトル「そこへ行けば、救える命がある。」も、どこかマロリーの言葉を彷彿とさせ哲学的です。さて、健康であれば医療を受けること自体が「有事」ですが、とりわけ山岳医療はその環境ゆえ、日常から隔絶された特殊な世界の医療とイメージされがちです。しかしわれわれも新型コロナという特殊な「緊急事態」を経験し、未曾有の感染症を乗り越え、平時からの対策の重要性を教訓として得ました。山岳医療も同様、その医療の充実に向け、平時からの取り組みが今まさに期待されています。（JMS主幹・野村元久）

